

学生図書委員だより

発行 二〇一〇年 五月
編集 学生図書委員

No.15

今月の二首

目のためるじとき絶望しひになし

工場の外の真つ青な麦

寺山修司

くるぐろとした工場の影にうずくまると、その青がただ、僕の目を刺す。

本屋大賞

大つかみ出版社マップ 出張編

今年で七回を迎えた本屋大賞は、書店員が選ぶというスタイルの文学賞です。最初は投票者も少なく、小規模なイメージでしたが、年を経ることに注目度がアップ。いまや書店はもちろん、文学界でも一大イベントとなりました。ノミネットされる作品は、エンターテイメント系が多いのが特徴。また、受賞歴がない(少ない)作家が大賞を受賞するケースが多く、これは全国の書店員の「この人に賞をあげたいっ」という気持ちと大いに関わっているようです。

実はこの賞、書店員ならばバイトでも投票資格があります。ということは、学生でも投票可能！これを聞いたあなた、早速書店でバイトをしてみたいくなったのでは？

あの頃は歩き疲れるまで

歩き崩れるようにとも睡眠りき

永田和宏

くたくたになれば、何も怖くなかった。

「怖い」と言ってしまうことが、怖かった。



100 years
that
the
dream

特集 若者とは悩み迷うもの……

「青い春」と書いて青春とは、

よく言ったものです。傷つき悩む少年少女は、いつだって物語の主角。壁にぶつかる君こそ、真のスターにふさわしい！

リーがとってもユニークな一冊です。お次は『ぼくが愛したゴウスト』(打海文三)。初めて行ったロック

コンサートの帰り、人身事故に居合わせってしまった少年。それから

というわけで、まずは『雨にもまけず粗茶一服』(松村栄子)から。

「これからは自分らしく生きることにしたんだ。黒々とした髪七三

に分けて、あんこ喰っててもしょうがないだろ」と言い残し、家を

飛び出した茶道の家元・遊馬(十八歳)。しかし向かった先は、なぜ

かお茶の本場である京都で？ 茶人たちに翻弄されつつ、主人公が自分の姿を見出していくストー

い『(桜庭一樹)、『レボリユーションNo.3』(金城一紀)など、読んで損はない作品ばかり(ここに

入りきらない!)。しかし、あえて寺山修司を紹介しましよ。『書捨てよ、町へ出

よう』がタイトルとしては有名ですが、『家出のすすめ』のほうの本

としてまとまりがいいのでオススメ。家出、反俗、悪徳と自立を勧

める寺山流青春論は、過激で挑発的。現代の若者が読んで、いや

現代の私たちだからこそ、読むとガツンとききます。青春はいつだって前向きであると同時に後ろ向き。反発と抵抗も、若さゆえと思えば愛しいものさ。